
ハルケギニア革命～レコンキスタ編

ラースグリーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルケギニア革命〜レコンキスタ編

【Nコード】

N1718J

【作者名】

ラーズグリーズ

【あらすじ】

地球とは全くの別世界ハルケギニアそのハルケギニアに一人の元空自パイロットがその世界で戦闘機パイロットとして戦う事になる。ゼロの使い魔の原作シナリオをかなり無視して作りますそこを忘れずにそれとタイトル名を変えました。

第一話　仕事の紹介

俺の名前は、大和　洋介^{やまじょうすけ}23年だ。

一年前までは空自でジェット戦闘機パイロットをやっていたが上官を殴ってしまい。

その上官を病院送りにしたために空自をクビにされた。

そんな俺にある男が仕事の話を持ちかけて来たので俺は今現在その男についていった。

「ここが我が会社だよ」

その男に着いてきた俺が見たのはそれはそれはデカイビルであった、しかもその会社は現在日本の経済界のトップの大企業の【風間財閥】であった。

風間財閥とは日本の企業でゲームやビジネスホテル建設、または自衛隊の武装の開発などにいろいろと手をつけている大企業であり世界に名を馳せている大企業である、その年収は国家予算に匹敵するとまで言われておりマスコミが以前報道していた。

そんな風間財閥の社員が何故に空自をクビになった俺に仕事を紹介してくれるのか不思議に俺は思った。

そんなこんなで俺は風間財閥の本社に入りそして社長室まで俺を案内した。

「社長、失礼します例のお客様です」

「入りなさい」

こうして俺を風間財閥の社長に会う事になるその再開で俺の今の常識や生活が一変にして変わる事は今は気付きもしなかった。

第二話く異世界（前書き）

オリジナルの国を出しています。

第二話　異世界

俺の目の前にいる男は初老くらいの男性であった多分、風間財閥の社長なんだろうと俺は思った。

その社長は俺を見てこう言った。

「ようこそ我が会社にはこの風間財閥の社長の風間　隼人かざまはやとと言います、早速ですが君に見て欲しい物があるんだがよろしいかね」

俺を風間社長の言葉に頷きそしてこの部屋にエレベーターがあったそれに俺は驚いたが俺は黙って風間社長に着いていった。

そしてエレベーターに入りそしてそのまま地下まで下がりそして目的地に着いたのかエレベーターはそこで止まった。

「さあ、君に見て欲しいのはこれだよ」

俺はエレベーターから降りて俺が見たのは、それはレシプロ機でしかも第二次世界大戦の機体の零戦52型やアメリカの艦爆のドーントレス等があった。

他にも第二次世界大戦の重戦や軽戦等がありそれはアメリカや日本の物ばかりであった。俺は思わず社長に言った・・・

「俺に、映画のスタントをやってくれないかと言いに来たんですか？」

俺は思わず社長に言ったしかし社長は首を横に頷き俺に笑いながら言ったその言葉は俺には信じきれなかった。

「いや、君をある異世界でこの戦闘機や爆撃機の戦うパイロットとしてスカウトしたんだよ」

俺は思わず笑ってしまったそれもそうだろういくら何でも異世界でレシプロ機のパイロットで戦ってくれなんて普通におかしいだろうと俺は思った。

しかし風間社長は俺に言った。

「いきなりこんな話を話しても信じられないだろうね」

はい、全くそのとうりです。

「君にある所に招待するよ」

風間社長は俺を案内してくれた地下の工場を歩き初めて数分で着いた。

それは何やら不思議な機械であった。

「不思議に思うだろ、これは異世界とこの地球を行き来する機械でね他にもあるんだがそれはさっきのレシプロ機や兵器を転送するためのこっちは人が行き来する所なんだ」

「はあ・・・」

いまいち信用性にかけるが俺は社長の言葉に信じてその装置に乗った。

「それでは社長、お客様転送準備は出来ましたいいですか？」

工場にいた一人の男性が俺と社長に言った。俺と社長は準備は出来たので頷いた。

そして装置が動き出したそして目の前が行きなり暗くなりそして目を開けるとそこは工場であったがさっきまでの地下工場とは違う気がした。

「じゃあ案内しよう」

俺は社長に着いていったしかし俺は気になることがあった俺はさっきまで地下の工場にいたはずなのに日差しが工場に入ってきているのだから俺は社長に聞いたが社長は・・・

「これからわかるよ」

その一言を言っただけであったそして俺が工場を出た時に見たのはその光景は全く信じられる物ではなかった。その工場を出た時にさっきまでの地下工場とは全く違いレシプロ機が飛んでいたが俺が驚

いたのはそこではなく零戦がドラゴンとドックファイトをやっていた事に俺は驚いていた。

ドラゴンなんてファンタジー小説にしか出てこないとしか俺は思ってたがしかし俺が見てるのは何だろう俺は夢を見ているのかと疑っていた。

「驚いてかね、ここは異世界ハルケギニア、そのハルケギニアの国のイルマその国がここなんだよ」

こうして俺の今までの生活や常識が無くなった瞬間であった。

第三話　パイロットとして

ドラゴンと零戦のドックファイトを見終わった俺は社長に説明された。

「ご存知、君が見たのは我々の世界からすればドラゴンと認識される生き物だ今の演習は君にこの世界を信じて欲しいために連れて来たんだ」

俺は社長の言葉に頷いたしかし何故か疑問に思う点が俺にはあった。

「失礼ですが何故、自分をこの世界でパイロットとしてスカウトしたんですか自分は航空自衛隊をグビになった男です何故そんな自分をこの世界の戦闘機パイロットにスカウトしたか教えてくれませんか」

洋介は風間　隼人に聞いたその質問に隼人は・・・

「君をスカウトしたのは今のイルマには君のように戦闘機パイロットとしての経験や知識が必要なんだよ、この国はわが社が武器の提供や支援、工場などは私が進めてるがハルケギニアから飛行機パイロットを募集するのに限界があるそこで君にはこの世界で戦闘機や爆撃機のパイロットの隊長になって欲しいんだよ、なにぶんこの世界の技術水準は中世ヨーロッパの科学技術しかないからね」

それに俺は納得した確かに俺達の世界からすれば零戦やドーントレス
は第二次世界大戦の武器で骨董品だが技術水準が中世ヨーロッパ
の時代の技術からすればオーバーテクノロジーみたいな感覚なんだ
ろうと俺は思った。

しかし更なる疑問点もあった。

「しかし、ハルケギニアからでもパイロットしては教育すればそれ
なりにやってはいけますよねさっきのドックファイトを見れば零戦
がドラゴンを圧倒的に倒してましたし」

これも気になる点でもあるハルケギニアの技術水準がいくら低くても
戦闘機や爆撃機の基本を教えれば操縦する事は出来るいちいち地
球からパイロット募集するよりもここで募集すれば効率は良いはず
だ。

「それは私もわかっているだが基本を教えてやれるだけで君のよう
に高い技術は君のような人物が必要なんだよだから身勝手かも知れ
ないがこの国でパイロットをやってはくれないか？」

風間社長は俺に言った俺は考えた確かに戦闘機パイロットの技術が
あっても国の役にたった記憶は俺には無い、ましてや俺は何故、空
自に入ったのは何の為だ俺はその答ならこの世界で戦闘機パイロッ
トとして志願するならわかるかも知れない。俺は空自に入った時の
答を見つける為に俺はイルマの軍隊に入る事を決めた。

「こんな自分で良ければよろしくお願いします」

こうして俺は異世界での飛行機パイロットになる事を決めた。
俺は空自に入った時のような甘い職業ではないことは俺は本当の軍
人になる覚悟は必要と俺は思った。

第四話く軍人（前書き）

風間財閥の経緯の説明が入ります。

第四話　軍人

俺はイルマの軍人になる事になった。

俺は気になる事があった風間財閥が何故、この異世界で軍隊を作っている理由を俺は聞いたが何でも風間社長のじいさんが戦後この世界に流れそしてイルマの国に流れ着いてしまいそのイルマの王様にあいそして地球の事を話したらその風間社長のじいさんを気に入らせてそのじいさんは日本が戦争中の時に陸軍の中将をやっていたらしくそこでは昔の陸軍みたいな石頭でもなく陸軍では珍しい意外と冷静で頭も良くその頭を生かしてアメリカを悩ませた事があったらしく、しかし当時の陸軍からはそのじいさんは陸軍からは面白くなかったらしい昔の陸軍の突撃を無謀と言いい効率の良い作戦をたててアメリカの進撃を止めた形跡があった。

その行為が陸軍将校から「腰抜けが戦争は作戦だけでは勝てぬ！最後は精神力だ！」と言われて陸軍将校からは変人扱いされていた。

将校からは良く思われなかった風間社長のじいさんではあったが下の兵たちからは信頼はかなり良かった。

そんな風間社長のじいさんがこの世界ではイルマでは英雄になっていた何でも昔トリステインがこの国の国境沿いの貴族達が連合を組みこの国に攻めてきたがその進行を逆に打ち負かしてトリステインに賠償金を払わしてそして国境沿いの貴族が勝手に連合を組んだのでトリステイン政府からその国境沿いの領土を貰うなどしたのである、しかもその時の逆に打ち負かしたのは風間社長じいさんが士気をとりそしてその時の賠償金や領土などが風間社長のじいさんがやった事である。

それでイルマでは風間社長のじいさんは英雄として崇められている、そして地球に帰る方法を見つけて帰った後にこのハルケギニアと地球を往き来する機械を発明して、そしてまたイルマに訪れ地球の兵器や製品をイルマに技術提供をしているらしい、それが元で風間財

閥が出来て表は地球で裏ではハルケギニアで利益を得ていた。そのじいさんが死んだ後でも風間社長の父さんやそして風間社長と続いている。

何よりこの国では風間社長のじいさんが遺言に「どんな政治でもよいイルマの明るい未来を作れ」と言われておりそして現在までにイルマの兵器技術が第二次世界大戦までに入ったのである。

そのいきさつを俺は聞いて何かすごい家系だなと俺は思った。

何やら風間財閥の始まりを聞いたが絶対に世間は信じないと俺は思った。

「それにしても、よくよく考えれば凄いよな風間社長のじいさん・」

俺は思った、だいたい異世界と地球を往き来する機会を発明するじたい頭の中がどんなふうになってるか気になる事ばかりだ。

「・・・これ以上は考えるのはやめよう」

何だがこれ以上あの家系に触れたら絶対に人の領域を越える気がしてならないと俺は思った。

そんなこんなで俺は今イルマの軍人になったのだからとりあえず俺は風間社長に言われた軍事基地に向かう事にした。軍事基地に入った俺はそこには軍服を来てる人がいた軍服を見ると自衛隊の服装と瓜二つであった。

「良く来てくれたね、私はこのイルマの首都の軍事基地の司令官のガーナ・イル・ガ・サンターナだ階級は大将だ話しはカザマ社長から聞いているよ」

その人はいかにも軍人らしい古風な人であつたしかも歴戦な軍人といわれる感じな人である事が見ただけでわかった。

「はい、風間社長から飛行機パイロットとして呼ばれました大和洋介です」

俺はガーナ大将に自分の挨拶をした。

そしてガーナ大将が俺に・・・

「風間社長から聞いてのとうりだがイルマは高い技術を持ったパイロットが不足している君は明日から新人たちに飛行機のイロハや飛行機の小隊長をやってくれたまえちなみに君の階級は少尉だ」

「わかりました」

こうして俺の異世界での軍隊生活が始まる事になる。

第五話く演習（前書き）

初の戦闘シーンですへタクソだと自分でも思います思ったら感想に
びしばし書いてください。

第五話　演習

俺がイルマに来て一週間がけいかしていた。俺は今はイルマの空軍に所属していた。

そしてイルマの新人と一緒に今日も基地で訓練が始まる。

「おらー！ 貴様らちんたら走んな！、最後の一周で下から五番までのやつは腕立て100をやらすぞ！！」

この言葉に周りの兵士は皆、必死に走った。そしてこのように朝飯前の基礎の練習が始まりそして終わる。

ちなみに基地の周りを10キロほど俺達兵士は走る戦闘機のGはかなり負担がかかるから走り込みはパイロットの鉄則でもあるが他の兵士にもいえる事である。こうして朝の走り込みが終わり朝食の間が始まった。

ちなみに朝食はパンに肉と野菜のスープに牛乳である。

ちなみに士官の食堂があるが俺はあまりお偉いさんの所の空気が好きではないので俺は一般兵士の食堂で食べている。

「隊長またここで食べてるんですか」

「そうですよ下士官でも一応、士官の食堂で食べた方がいいですよ」

この二人は俺の戦闘機の小隊の部下で一人はパリと言う少年で髪型は金髪で背は俺より低く少年兵士である。

そしてその隣は少女兵士のナイと言われてパリ同様、金髪でパリは15歳でナイは17歳であり二人ともイルマの平民の出身らしい社長から聞いたがこのハルケギニアは貧富の差が激しく貴族はメイジと呼ばれてるらしく貴族達は平民達の扱いはかなり酷いらしくトリステインやロマリア当たりの貴族は貴族の服を少し汚しただけで死刑にする始末であり表沙汰そんな事は許されませんが実際にやっている。ただしこのイルマは元々はトリステインの属国らしくそして風間社長のじいさんのお陰で独立はしたらしいそれにイルマは貴族の称号はそれなりの実績や人の役にたつ発明などをしなければメイジであっても貴族の称号は貰えないこの国では貴族はそれなりの実績があった人間が貰えるようになってるつまり実力主義と言われてるそこはゲルマニアと呼ばれてる国の風習を少し真似た所もある。そんなイルマは一応、王国と名乗ってるがトリステインの貴族はイルマを毛嫌いしている元々はトリステインの属国に過ぎないのでそれが独立はして挙げ句の果てに領土の一部を取るなどをしているからだ（トリステイン貴族が勝手に連合を組んで攻めに來たのが悪いと俺は思っている）ちなみにイルマの科学技術はハルケギニアでは今は一番とされていてゲルマニアの商人は現在イルマが一番の得意様になっている、何せ新技術を使った酒や保存食などをゲルマニアが買っているからだ。

現在はゲルマニアやガリア、アルビオンはイルマを高く評価しているイルマは国の面積こそは狭いが技術力はハルケギニアの大国が一目をおいているために現在は戦争を起こす気配はないがしかしトリステインの緊張は未だに続いている、トリステイン貴族は昔の戦争を忘れていなくまたトリステインと戦争になる可能性が高い何せトリステイン貴族は伝統を重んじる国でありプライドはハルケギニアでは一番とされるくらい高いのである。

トリステインの王家は戦争をする気はないがトリステインの貴族がまた勝手に連合を組んで攻めに來る事が考えられている。

その為に現在トリステインと国境が近いイルマ貴族たちに警戒をイ

ルマの王家は送っている。そんな話を思いだしながら俺は二人言った。

「うるせえ、俺の勝手だろ」

「また、少しは士官の自覚をもってください」

ナイに言われたがそんな俺にはかんけないとにかく俺はそんな二人と話しながら朝食を食べてそして昼の勉強になった。

この国の軍隊はハルケギニアでは珍しくすべてを訓練に時間を使わない何故なら第二次世界大戦の武器とは言えメンテナンスは大切だそれにイルマ独特の対メイジ戦闘や竜騎士やグリフォンなどを主流とした軍隊に対する対策等を勉強するからだ昼までこの勉強は続くそれを午後の訓練で実績するそれがこのイルマの軍隊の基本である。昼の勉強が終わりそしていよいよ午後の訓練に移る。

イルマは陸軍と空軍の2つに別れている陸軍はこれから対メイジ戦闘の訓練がある。

そして俺の所属する空軍はこれから竜との模擬戦が始まる。

「いいかパリ、ナイ昼の言われたとうりにやれよいいな！」

「はい！」

俺の掛け声にパリとナイは元気に返事をした、そして相手はイルマの空軍の竜騎士達である数は20くらいはいるしかしイルマの竜騎士は複雑そうな顔をしていた何せ今まで竜騎士がレシプロ戦闘機に勝った経験がないからだ勝てもしないのに何故、竜騎士を残してい

る理由は主に偵察や隠密任務などに使われているからだレシプロ機は速くて旋回性能も竜と比べると天と地の差があるがレシプロ機は竜と比べると音がうるさい為にだから隠密や偵察などに使わされている竜騎士になったものは大抵が飛行機を乗る条件をクリアしてないものがほとんどであった。

名目上、竜騎士を残しているのはこの世界ではメイジが戦場では最強とされている為、他の国に対してもこのように少数でもメイジを残して置けばそれなりに役にはたつがイルマの竜騎士や複雑な心境であった。

「機体に乗り込むぞ」

「はい」

こうして俺達は戦闘機に乗る事にした。

俺達小隊が乗る戦闘機は零戦52型である、零戦といっても少しは改良はされている。

まず防御力を少し向上させたことあと7.7mm 機銃を12.7mm 機銃に変更されてる所でそして速度も最高650とかなりアップしていた。そして俺達小隊は空に上がった。

「よし、行くぞ！」

滑走路から零戦が上がり始めた。

そして三機とも無事に上がったそしていよいよ模擬戦闘の始まりだった。

そこで俺は無線でパリとナイに言った。

「いいか、スピードの差がありすぎる目標を肉眼で確認したらすぐに掃射してすぐに旋回しろいいな！」

「了解!!」

こうして竜騎士との模擬戦闘が始まった。

洋介の小隊は肉眼で竜騎士を確認してすぐに機銃を掃射した。そして掃射してすぐに旋回したすぐに旋回した理由はスピードの差がありすぎると下手をすれば激突するからだ洋介はそれを知っている為に二人に指示をした。

今の攻撃で竜騎士には赤いペイントが五匹の竜騎士についたちなみに機銃に装備されてるのは演習用のペイント弾である。

他にも実戦むけの衝撃弾もあるが竜が暴れると面倒な為にペイント弾でにしてある。

竜騎士はすぐに旋回した方向に向いたがやはり固まっている為に洋介達のいい的になっていた竜騎士もそれなりに体制は整ってはいる竜騎士にも戦闘機同様、無線は持っているが洋介達の戦闘機の無線に比べると聞く音はかなり悪くなかなか編成がとれていなかった。そこを洋介達は見逃さず。

「いい、的になってるぜ！」

三機の機銃が竜騎士は襲われる残りの竜騎士は10匹になっていた。竜騎士の隊長は固まると的になる散開して追撃すると言ったがこの

判断は逆に狙い易くしてしまった。

竜騎士が固まると何匹かは倒せるが残った竜に攻撃される恐れがあるからだそれを逆に散り散りなってくれば逆に的を絞る事が出来るからだ。

「散開して、一気に敵を狙う自由攻撃を命ずるいいな！」

「「はい」」

こうして竜騎士の隊長の判断ミスが原因で次々と撃破されてしまい結局、竜騎士は全滅してしまった。

零戦の圧倒的な勝利に終わった。

第六話　会議

イルマの軍隊の将校がここイルマの首都、イグアイナでここは王家の城に集結していた。

そして風間社長もこの会議に出席していた。

「現在の各国の状況はどうなってるかね？」

この人はイルマの王様のハーケン・イグアイナ・ド・イルマである風間社長とは長い付き合いの王様である。

「はい現在、アルビオンの王家とレコンキスタの戦いですがやはりレコンキスタの軍勢が王家を押しています」

一人の将校がアルビオンの戦争情勢を言った

「やはり貴族の殆んどがレコンキスタに着いたが為か・・・」

ハーケンは難しい顔で呟いたそしてハーケンは他の国の情勢を聞いた。

「アルビオンの内乱で各国の動きはどうなってるガーナ大将」

「現在、レコンキスタの侵攻に備えトリステインはゲルマニアと同盟に動いています、ロマニアに関しては目立った動きはありません、これは確かな情報ではないですがガリアはレコンキスタに援助をしているとの報告が入っています」

「そうか・・ガーナ大将報告はご苦労してカザマ君、現在の陸軍、空軍の戦力に関してよろしく頼む」

ハーケンの言葉に風間社長は頷いた。

現在の風間社長が地球の出身なのはここイルマでは高官や王家のみが知っている風間社長はイルマの軍隊の最高司令官になっている。

「はい現在の陸軍の武装のM1ライフル、重機関銃のM2を始め新しく開発した短機関銃のトプソンM1、軽機関銃のブローニングを配備しています戦車の配備も着実に進んでいます空軍も戦闘機の零戦を始め爆撃機のドーントレスも同じく量産を急いで進めています」

風間社長の言った陸軍の武装のライフルのM1はアメリカ軍が昔使っていたもので正式にはM1セミアutomatikライフルである。弾の日本のボルトアクションと違い自動で弾が装填される為に第二次世界大戦の時にはアメリカ軍の歩兵に一般的に使用していた銃である。

他にもブローニングオートマチックライフルLMGと呼ばれていた。この銃は第一次世界大戦に開発されたM1918A1を改良したブローニング(LMG)は劣悪な条件下における信頼性は高い、弾を装填しても比較的軽量なのが好評でもあった。

ちなみに空軍戦力は日本の戦闘機が多く陸軍は比較的アメリカ製のにしている。

アメリカ製の武装は日本より優れているからだ。

「そうかカザマ君、してアルビオンの王家が落ちるのは私は困るアルビオンの王家と同盟を結んだ方がいいと思うが諸君らはどう考える」

ハーケンが将校建ちに聞いた、すると一人の将校が質問をしてきた。

「ハーケン様、アルビオンと手を結ぶのは確かに良いことだと思われませんがそれは強大な戦力があるレコンキスタを確実に敵に舞わす事になりますか」

「それは私も分かっているしかし、遅かれ早かれレコンキスタはこのイルマだけではないロマニアを除く各国に戦争を仕掛けるつもりでいる彼らの狙いは聖地の奪還だからのそれならばアルビオン王家と同盟を結べばそれなりに有利になる他に私の考えに依存があるものはいないか？」

聖地の奪還それは東に位置する国であるそこはエルフが住んでいるからだこの聖地奪還は昔から各国が挑んだがすべて失敗に終わっているつまりレコンキスタは各国の国を取り込んでハルケギニアの戦争が終われば次は東の国のエルフとの戦争になるエルフとは出来れば戦いたくもないからだイルマの武装でもエルフと戦っても勝てる見込みがないからだすでにイルマの政府はエルフの先住魔法がカウンターである事が判明しているこのカウンターに対抗する手立てはイルマにはないだからエルフと戦うのは自殺行為だとイルマの政府はわかっているだからレコンキスタが強大になる前にイルマは戦争

を仕掛けるつもりでいた。

「依存がなければ直ぐにアルビオンに同盟の場を儲ける直ぐにアルビオンに大使を派遣せよ」

こうしてイルマはアルビオン王家との同盟関係を結ぶ姿勢を取った同盟決定から数日後、アルビオン王家から同盟を結びこうしてイルマはレコンキスタの戦争になる事になった。

第七話　戦争に向けて

アルビオン王家との同盟が決定してイルマは現在レコンキスタの侵攻が受けやすい村の住民を非難させていた、そしてその非難した場所に現在、軍が駐留していた。

戦闘機、爆撃機、迫撃砲や重機関銃や戦車などが配置されていた。そして洋介の基地も慌ただしく敵の進撃に備えていた。

「やれやれ戦争か・・・」

俺は少し空を見た日本では戦争なんて無縁に近かったかもしれないしかし俺は今は違う俺はイルマの軍人だこの覚悟は出来なきゃいけないと俺は思った。

実際に初めて実戦に行く事になると少し震えるなそんな考えにパリ、ナイが来た。

「隊長、こんな所で何してるんですか？」

「ああ、パリ・・・少し考え事だ」

俺がそう言った時にナイが意外そうな顔で・・・

「えー意外、隊長が訓練以外で頭使うことあるんだ！」

ナイが洋介の行動に驚いた感じで言ったそんなナイに洋介は・・・

「お前な・・・はあ・・・戦争が始まる時に気楽だなお前は」

「そんな事はありませんよ隊長これでも緊張してますよ」

ナイは洋介にそう言ったしかし洋介は真剣な表示でパリとナイに言った。

「パリ、ナイこの話しは本気だ、お前らいいか戦争で祖国を守るとはいえ死に急ぐなよ死になつたら逃げろこの忠告を無視たら俺が逆にお前らを殺すわかったか！」

「「・・・・」」

この洋介の発言に二人は真剣に聞いた洋介はこれから戦場に向かう今までの気持ちや誤った判断をすればこの二人を殺す事になる。

洋介はまだまだこの二人は若いだから少しでも真剣にならなければならぬ。

「安心しろお前らをちゃんと俺が守るお前建ちはまだ若い死ぬなよ」

「「はい！」」

その数日後、アルビオンに派遣する陸軍、空軍部隊が決まりその空軍に洋介達の小隊も含まれていた。

そして洋介に取って初めての実戦と戦争が始まる。

第八話 イルマの空中艦隊（前書き）

新年明けましておめでとうございます。

それと最新が遅れて申し訳ございません実はこの話をありにするか無しにするかを迷いましてそれが原因です。結局はのせる事にしましたがでは最新話をどうぞ短い話ですけど・・・

第八話　イルマの空中艦隊

現在のアルビオンはレコンキスタに七割が占領されている。

王家の最後の砦ニューカッスル城と町の近くに砦を張って現在は持ちこたえてる状況であつたそしてレコンキスタは現在ニューカッスル城に総攻撃の下準備をしていた。

現在レコンキスタの戦力はメイジと平民兵士を入れて三万の兵力でアルビオンが誇る空軍戦力の竜騎士も殆んどがレコンキスタに渡つた状態になっていた。一方、現在の王家の兵力は一万五千の数しかないそこでイルマは陸軍、空軍の部隊を合わせてアルビオンに五千の援軍を送った。

しかしこれはアルビオン王家から見れば不信に思ふ所である明らかにレコンキスタの数は王家とイルマの軍隊を合わせて二万これを考えるとアルビオン王家は不安になるがそれは違うイルマの武器はこれまでのハルケギニアとの武器とは異なる物であるからだ。

銃にしても火縄銃やマスケット銃よりも命中制度や威力が俄然と違ふ一発打ったら再装填の必要がない勿論、弾が無くなれば装填の必要はあるがこれまでのハルケギニアの武器の常識を覆す物で構成されている。

戦闘機も竜と比べると速度、旋回性能、射程が全てにおいて上回る大砲も射程、破壊力もハルケギニアの旧式大砲とも桁がちがう。

イルマの軍隊は量ではなく質である。

勿論アルビオン王家がこの事を理解するのはニューカッスル城の防衛戦の時である。

そして現在イルマの空軍、陸軍部隊はイルマの飛行船に乗っている、イルマの飛行船はハルケギニアの木製の船とは違い第二次世界大戦の軍艦にしてある、それは風間財閥の最新の技術者達が作った新型飛行船である。

例を上げれば宇○戦○ヤ○トを想像する感じである。

どうしてそんな技術力があるのか不思議に思うがそんな感じで現在は空中戦艦二集、空母一集、補給艦二集、輸送船二集が現在アルビオンのニューカッスル城に向かっている。

しかし第二次世界大戦の軍艦クラスを空中艦に改造しても空を飛んでいる以外は武装は第二次世界大戦クラスの武装のままである。

これはエンジンくらいを新型技術するなら良いが武装まで現代のイージス艦並にするとイルマの軍隊が着いていけないからだ。

これはイルマの武器の技術力が第二次世界大戦までであり行きなり地球で60年以上も進んでいる技術を投入すると整備や補給に多大な影響が出るからだ。新型エンジンくらいならイルマの技術者でも簡単なメンテナンスは出来る現在ではイルマの空中艦は戦艦が四集、巡洋艦が六集、駆逐艦が八集空母が四集、輸送船十集、補給艦が十二集までが空中艦隊にしている。これだけの艦隊を空中艦に出来る金がある理由は風間財閥は新型エンジンをイルマの軍艦に着けているだけで武器はイルマの技術者がやっているからだ。

勿論イルマの戦艦や空母は地球の軍艦を参考にしているから洋介みたいな地球出身から見れば少しは地球を思い出す感じである。

説明が長くなったが現在の空中艦隊の空母に乗っている洋介は・・・

「空母や戦艦を空に飛ばすなんて風間財閥の技術者は何者なんだよ・・・」

そんな事を呟いていた実際に艦を空を飛んでいる事は現代の地球でもアニメやマンガの世界くらいと思っていたが洋介はそんなアニメみたいな艦に乗っていて呟いた。

洋介が風間財閥の技術者に会うのはこのレコンキスタの戦争が終わってからになる。

第九話　ニューカッスル城にて

イルマの空中艦隊の戦艦、『イグアイナ』

『ハガネ』と空母『キャリバー』と輸送船『カンパニー』『キング』補給艦『ソウル』『サクラ』が現在ニューカッスル城に入ろうとしていた。ニューカッスル城に誘導するためアルビオンの竜騎士が現在イルマの艦隊をニューカッスル城に行く為に誘導していた。

無事に全艦隊がニューカッスル城に無事に誘導されていた。

そしてイルマの戦艦『イグアイナ』に一人の司令官の青年とその他数名の護衛のメイジが『イグアイナ』に来ていた。

その司令官はアルビオン王家のヴェールズである。

そこでヴェールズは戦艦『イグアイナ』に入りヴェールズは自己紹介をした。

「我がアルビオン王国へようこそ私はアルビオン王家の王子にして最高司令官を勤めているヴェールズだ」

現在はヴェールズは『イグアイナ』の作戦室に招待されている。

そしてイルマの艦隊司令官も挨拶をした。

「王子、自ら挨拶をありがとうございます私にはイルマの艦隊司令のデルマ・ド・サン・カルマです」

イルマの艦隊司令もちゃんと挨拶をした。

そしてヴェールズは笑いながらデルマに言った。

「いや、しかし驚いたねイルマは鉄の船を空に飛ばしてしかも戦艦の主砲の大きさや戦艦自体も我がアルビオンの最大の戦艦『ロイヤル・ゾブリン』の一回りデカイ戦艦を二集も持っている恐れいるよ」

ヴェールズは少し微笑みながらデルマに言ったそしてデルマも・・・

「王子にそう言って貰えると我がイルマも喜ばしいことですありがとうございます」

デルマはヴェールズに頭を下げたそしていよいよ本題に入る為に戦艦『イグアイナ』にてアルビオンの将校とイルマの将校で話し合いになった。

何故戦艦で話し合いをするかはヴェールズがもしもの時にレコンキスタのスパイの事を考えて戦艦『イグアイナ』で会議を開いた方が良いと結論になりこの考えにアルビオンとイルマは賛成した。

そして現在のイルマ陸軍部隊はニューカッスル城で戦車や装甲車、迫撃砲、バズーカ、重機関銃などを補給艦から下ろしている作業をしていた。

アルビオンの兵士はイルマの武器を不思議そうに見ていた。
そこに一人の兵士がイルマの兵士に聞いた。

「なあ、その武器はなんなんだイルマの武器はこれなのか？」

それは重機関銃のM2を見て聞いたM1はハルケギニア等の同じみ

のマスケット銃や火縄銃に似ている為に気になるがM2や戦車はこのハルケギニアでは全くの未知の兵器の為に不思議に思う。

「ああ、これは俺達イルマの主力兵器だからな多分そっちにも配備が決まると思うぞ」

この兵士の言葉に偽りはなかったイルマの軍の上層部はアルビオンの平民兵士等に配備が出来るようにかなりの武器を補給艦に積んでいる。

そしていよいよイルマ、アルビオン連合によるレコンキスタの戦争が始まる。

第十話　ニューカッスル城攻防戦1

現在レコンキスタはアルビオン王家の砦を殆んど落としている。

現在王家はニューカッスル城を始めとする砦はごくわずかで全ての兵力はニューカッスル城と城の町を要塞にして持ちこたえている状態である。

そしてレコンキスタは二万の兵力をニューカッスル城に向けて侵攻している。

しかしレコンキスタは何故、二万の兵力を出せる理由は実はレコンキスタはアルビオンで反乱を起こした貴族の連合ではなくアルビオンを始めとするトリステイン、ゲルマニア、ガリア等の貴族も少数ではあるがレコンキスタに参加している。

元々レコンキスタは聖地を目指しているものが集まっている貴族の連合でありその貴族やその貴族の部下を入れて現在のレコンキスタは兵力は3万を越えている。

しかし全ての貴族がレコンキスタの聖地奪還が目的ではない表には出さないが金や地位を目的として参加している貴族も少なからずいやレコンキスタに忠実な貴族は少数である。半分近くは自分より上の位の貴族の命令で仕方なくレコンキスタに参加しているものもある。

レコンキスタの無茶苦茶なやり方に不満に思う貴族や兵士は出ているのも事実である。

元々、彼らは王家に使っている貴族などだから自分の上司がレコンキスタについた為に仕方なくやっている貴族にしてみれば不満に思う。

しかし彼らは軍人であるため上の命令には逆らえない逆らえば自分の命や自分の家族がレコンキスタに殺されかねないからだ。

事実レコンキスタのやり方に文句を言った貴族が家族とその貴族が殺された経歴がある為に逆らう事ができない。

そしてそのレコンキスタは現在空中艦隊10と竜騎士を50と陸上部隊一万二千を率いてニューカッスル城に向かっていた。

レコンキスタ空中艦隊司令官のハルセーが笑いながら自分の艦に演説を言った。

「諸君！、我々レコンキスタは正義があるそれは何故だ！！簡単だ聖地を奪還するからだ！！我々の目的を理解しない王家は裁きを受ける義務がある聖地奪還は我々が神たる存在のプリミルが望んでいるのに王家はその考えに賛同していない王家は神の裁きを我らがやるのだ！！」

この演説に空中艦隊のハルセーの戦艦では歓迎の声が上がったそしてその演説に兵士建ちは

「レコンキスタ万歳！！」

「プリミル様の為に！！」

「聖地奪還の為に！！」

この演説でハルセーの戦艦の士気は上がっていたしかし一つの巡洋艦の艦長が呟いた。

「あの戦艦の演説はハルセー司令官の艦からか？」

「はい、そうでありますダーナ艦長!」

この男はこの巡洋艦の艦長のダーナである。そのダーナはハルセーの演説に呆れていた。

「ハルセー司令官も楽観的すぎるイルマが王家と同盟を結んだのだから簡単にはニューカッスル城は落ちはしない」

ダーナは元々は上司がレコンキスタに参加している為に仕方なく参加しているだけでレコンキスタの利益や地位などに興味がない。しかしダーナの指示や判断力はレコンキスタには欠かせない為にレコンキスタはダーナを巡洋艦の艦長に任命している。

そしてダーナはイルマの武器や危険性をかなり理解しているがレコンキスタの上層部はあまり信用していない。イルマの武器は銃が歩兵の一般的な武装であるためである。

この世界はメイジが戦争の主力との認識がある為にレコンキスタはイルマを小国程度が王家と同盟を結んでもたいした脅威ではないと見下している。

この上層部の考えにダーナは・・・

「上層部はイルマの評価が甘すぎるこんな艦隊程度ではイルマには勝てない」

「艦長、その言葉をハルセー司令官に聞かれては大変ですよ!」

「いやすまんな君に愚痴を言ってしまった」

こうしてレコンキスタの艦隊がニューカッスル城に向かっていたがイルマの偵察機がすでにニューカッスル城に報告をされている事は

ハルセーは勿論、ダーナも気付いていなかった。

第十一話くニューカッスル城攻防戦2（前書き）

かなり短い話です

第十一話　ニューカッスル城攻防戦2

現在イルマの竜騎士が無線機でニューカッスル城に敵の進行状態を報告の最中であつた。

「敵の規模はどのくらいだ？」

『現在、戦艦が3、巡洋艦4、輸送船が3その護衛に竜騎士が50くらいの規模でニューカッスル城の方面に向かっています』

「わかつた現在陸上部隊をと航空隊をそっちに向かわせてるすぐに戦線を離脱しろ」

『了解しました』

その現場を見ていたアルビオンの將軍クラスはビックリしていた無論ヴェールズも無線機のやり取りに驚いた。

「ヴェールズ閣下、敵はかなりの部隊でこちらに向かっていますすぐに部隊を向かわせましょう！」

「ああ、わかつた我がアルビオン軍もすぐに陸上部隊を派遣する」
こうして作戦が決められた。

まずイルマの航空機隊でアルビオンの艦隊に攻撃を仕掛けさせそこからアルビオンとイルマの陸上部隊で残りの陸上部隊を攻撃する作戦で決まった。

そしてイルマの空中空母『キャリバー』に搭乗している。

洋介の戦闘機隊も発進命令が出された。

「すぐに搭乗しろ敵が来てるぞ！」

「はい！！」

洋介の声にパリとナイが返事をした。

今回の航空機隊だけでも戦闘機20と爆撃機10機が出撃する事になってるアルビオン軍の竜騎士はこの攻撃には参加しない竜騎士と航空機では速度の差がかなりあるためこの第一次の攻撃には参加しないあくまでこの攻撃は足止め残った敵は陸上部隊が攻撃する事が決定されている。

敵が陸上部隊を地上におろしてそこからニューカッスル城に向かうかも知れないかだし爆撃機や戦闘機で攻撃する手段もあるがしかし爆撃機や戦闘機の地上攻撃は牽制や威嚇くらいなものであるしこれも今回出撃する機体は本格的な陸軍の爆撃機ではないため陸上攻撃にはあまり向いてないしかし出来る限り陸上部隊を攻撃しておけとはされている。

「よし、行くぞ！」

こうして洋介達の戦闘機小隊も出撃したそして他の戦闘機の零戦や

ドーントレスが空に飛んでいった。

これがイルマにとっての初めてハルケギニアの軍隊を相手にする初の戦闘機と爆撃機の投入であった。

こうして航空機30機がレコンキスタの艦隊に向かって飛んでいった。

第十二話　ニューカッスル城攻防戦3

ニューカッスル城から飛んだイルマ航空機隊は竜騎士隊の無線情報の場所に向かっていて、そこに無線が隊長機からの無線が入ったその隊長はテアル・ドーン・グラスと言われるイルマの中佐である。その隊長から無線で攻撃手順を話した。

「いいか先制攻撃は零戦部隊がやれその後にドーントレスは艦隊の攻撃をいいか！」

「」「了解!!」「」

そこから無線が終わったそしてそこから何分かつた時である一人の零戦のパイロットが空中艦隊を発見したその旗の紋章はレコンキスタの旗であった。

レコンキスタ艦隊を発見した零戦パイロットはバンクをふった。それは敵を発見先制攻撃は成功という意味である。

「まずは俺達の攻撃だ俺に着いてこい！」

テアル中佐の指示に零戦部隊は着いていった、無論そこには洋介達の小隊も参加している。

「よし、俺達の特訓の成果をたっぷりと見せてやろうぜおまえら！」

！」

「「はい!!」」

洋介達の小隊もテアル中佐の指示に従い攻撃進路に合わせたそして後ろには爆撃機のドーントレスが後ろに着いてきていた。そして攻撃進路に到達した零戦部隊は竜騎士に目標を会わせていた。そこでようやくレコンキスタの艦隊がある音に気が付いた。

「なあ、何か聞こえないか？」

「確かに・・・竜の声か？」

「でも竜がこんな声をだすか」

レコンキスタの艦に搭乗している。

一般兵がそんな話を話していたしかしすでに気付くのが遅れた。

零戦部隊は竜騎士にドーントレス部隊は艦隊に目標を定めていた。

そして洋介達の小隊がレコンキスタの竜騎士の小隊五匹を的を絞って急降下して20m機銃を掃射した。

そしてこの攻撃にレコンキスタ艦隊は敵の攻撃と気が付いた。

「敵襲!!」

一人の兵士が叫んだこの声にレコンキスタの兵士はすぐに戦闘体制に入った。

そしてレコンキスタ戦艦に乗っているニューカッスル城攻略に出された最高司令官のハルセーは怒鳴っていた。

「何をしている！早く敵を落とさんか！！」

「し、しかしハルセー司令官、敵の竜は凄い速度で我が艦隊と竜騎士を次々と撃破しています！！」

「えーい！輸送船に乗っている兵士をすぐに降ろせ！全て撃破されてはニューカッスル城を攻略は出来んすぐに伝達をしろ！！」

「り、了解しました！！」

兵士の一人がすぐに輸送船に連絡をするため発光信号を送っていた。この命令で輸送船三集は直ぐに陸上部隊の兵士をおろすために地上に不時着したしかしそれが仇となりドーントレスのいい的になっていた。

二機のドーントレスが輸送船に近づいていた。

「もらった！」

ドーントレスの500ポンド爆弾が輸送船に命中したこの攻撃により輸送船の一集が大破したこれにより陸上部隊の三分の一が消滅し

た。

この光景にダーナは直ぐに命令を出した。

「直ぐに、輸送船の盾になれ陸上部隊を皆殺しにするな！急げ！！」

「了解！！」

巡洋艦艦長のダーナの命令でダーナの巡洋艦は直ぐに輸送船の盾に回った。

ダーナはレコンキスタのやり方に不満は抱いているがしかし彼も軍人である。

仲間の危険を見逃す事は出来ない。

このダーナの判断で残りの輸送船は無事に陸上部隊を逃がす事に成功した一万二千もいた兵力を八千までに下げた事はドーントレス隊の活躍は大きかった。ダーナの巡洋艦は盾にした後は直ぐに避艦命令が出された。

艦隊が次々と撃破されていくなか竜騎士もかなり減らされていた。戦闘開始数分で50もいた竜騎士を半分までに減らす事が出来た。現在残りの竜騎士を全滅させる為に洋介達の小隊も頑張っていた。

「竜騎士二匹もらい！」

レコンキスタの竜騎士を洋介は捕らえていたそして零戦の20mm機銃が火を拭いた。

竜騎士二匹に命中した命中した竜騎士が爆発したこれは火竜の胃袋

は火の玉出すために胃袋の中は油の塊にみたくにできている。
洋介の零戦の20mm機銃がその油に引火した爆発をしたのである。
う。

こうして戦闘は続けられ竜騎士は全滅をしたレコンキスタの艦隊も
ハルセーの戦艦と巡洋艦も残り二隻だけであるしかしハルセーは戦
闘をやめようとしなかった。

「何をしている！敵は少数の竜ではないか早く倒せ！！」

ハルセーの声が艦隊に響くハルセーの前に一人の兵士がきた。

「ハルセー司令官、敵の竜がこちらに来ています直ぐに避艦命令を
！」

「ダメだ！我がレコンキスタの艦隊は最強だ退却や撤退の二文字は
ない！！」

まるで昔の日本陸軍のような考えがある。
ハルセーはそんな部下の命令を聞かずにいた。

「敵、竜騎士接近！」
ドントレスの爆弾がハルセーの戦艦に命中した大破こそしなかつ
たが火の周りが激しかったこの状況にも関わらずハルセーは避艦命

令を出さなかった。

まだ戦闘継続の構えであった。

「ハ、ハルセー司令官避難命令を・・・」

「まだだ！あの忌々しいイルマの竜騎士を落とすまでは！！」

こうして敵の最高司令官ハルセーは火の中に消えた。

そして戦闘が終わったレコンキスタの被害は艦隊は全滅して陸上部隊も一万二千もいたなか八千になり三千もの兵士が無くなった。

しかしまだ敵は諦めていなかった。

航空機隊が戦線を離脱した時を見てレコンキスタ陸上部隊はニューカッスル城に進んだ。

そしてそれがアルビオンイルマ連合とレコンキスタの陸上部隊との対決になった。

第十三話　ニューカッスル城攻防戦4

航空機隊の活躍によりレコンキスタ艦隊と竜騎士を壊滅して制空権は無くす事に成功した事でニューカッスル城に向かう部隊は陸上部八千だけであつたしかも艦隊を無くしたお陰で彼らは空の支援を無しに戦わなければならない。

この状況では撤退を考えるのもあるが彼らは撤退を考えていなかった。

最悪の事に陸上部隊の司令官と下士官はレコンキスタに忠実な兵士の為に彼らは投降をしたりしないしかしこれは下の兵士からしてみれば嫌な事である。

特にレコンキスタの平民兵士は基本的に傭兵であるため彼らはレコンキスタの忠義など知った事ではない。

彼らは元々、名誉や国の為に戦っている訳ではない金や今日生きていける分の金があればいいのだからいくら金をいっぱい出してくれると言っても命は惜しい勝つ確率が低い戦は出来ればやりたくはないがここで下手に逆らうとメイジに何をされるかわかったものではないと彼らは分かっている。

そんな状況のせいかレコンキスタの部隊は士気が低かった。

平民兵士だけではない下士官以下の兵士はさっきの戦闘でうんざりしていたまたあのような竜が襲ってくると考えている為か彼らの士気が低かったそんな状況に不満を懷いた下士官の一人が怒鳴った。

「何を黙つとるか！敵や竜が恐くて戦争が出来るかハルセー司令官の仇は我々が打つのだ！！」

今回ニューカッスル城攻略に派遣されたレコンキスタの士官はどう

も日本陸軍のような考えの持ち主が多いようだハルセーが良い例である。

下士官の言葉に兵士は動いたニューカッスル城を目指して・・・そして現在ニューカッスル城から出たイルマの陸上部隊が三千、そしてアルビオン二千の軍隊でニューカッスル城から出た場所で待機していた。

そこは戦車、迫撃砲、無反動砲、重機関銃が設置されていた。

ちなみにイルマが使う戦車は三式中戦車 チヌと呼ばれる戦車であるこの戦車は旧日本軍が開発した戦車であり当時のアメリカの強力な戦車に対抗する為に作られた戦車である。終戦までに60輦まで完成させたがしかし本土決戦用として温存された為にこの戦車は実戦に投入される事はなかった。

しかしこの戦車は旧日本軍のこれまでの戦車と比べると装甲や火力は旧日本軍の中では高いクラスである。

その戦車をイルマは現在この戦闘に10輦を投入している。

そして戦闘準備が完了してレコンキスタの陸上部隊を待っていた。

そこで陣地を構えているイルマの司令官は真田 幸弘きんこう彼もまた洋介同様この世界にスカウトされた元陸上自衛隊の自衛隊である。現在の陸自に不満を持っていてそこに風間社長に声をかけられたのだ。そんな真田はレコンキスタの陸上部隊を待っていた。

「出来れば投降してくれると助かるが・・・仕方ないのか」

彼がそんな事を言った彼は無駄な血を流したくはないがしかしレコンキスタの陸上部隊がこちらに向かっている報告が航空隊からの連絡で彼は知っている。戦うならば戦うが彼も軍人である仕方のないことだと腹を決めた。

「レコンキスタの陸上部隊が来ました!!」

一人の兵士が敵が来たことを真田に教えた。真田は無論直ぐに命令を出した。

「戦車部隊に連絡、直ぐに射撃準備、迫撃砲、無反動砲は射程にはいたら打つよに伝達!!」

「了解!!」

空中艦隊を失った悔しさを抱えて向かってくるレコンキスタ陸上部隊はニューカッスル城を目指して進軍してきた。

第十四話　ニューカッスル城攻防戦5

アルビオンイルマ連合に接近してくる。

レコンキスタ陸上部隊しかし彼らは何の作もなく突進してきた。

しかしこれは仕方のない事だ。

レコンキスタに関わらずハルケギニアの軍隊は基本的にメイジを覗けば中世ヨーロッパ時代の兵器しかない大砲も射程もそんなにない銃にかんしては火縄銃やマスケット銃しかなく一回打ってしまつたら再送填が必要なのである。

それに比べイルマは兵器こそは地球では60年以上も昔の兵器であるがハルケギニアからしてみれば最高の高性能な兵器ばかりである銃だけでもメイジ相手に互角に渡り会えるのだから。

そして無反動砲や迫撃砲の射程に入ったレコンキスタはすぐに地獄を見る事になった。

「射程に入りました」

「今だ打て!!」

真田の指示により迫撃砲、無反動砲が打たれた。

迫撃砲、無反動砲の砲撃がレコンキスタ陸上部隊に命中した。

次々と迫撃砲、無反動砲が何十発も地上に命中してレコンキスタ兵士を吹き飛ばす。

「ぐわ!!」

「ぎゃあ!!」

迫撃砲や無反動砲で吹き飛ばされた兵士は第一回だけでも三百ちかい兵士が戦死した。

馬に乗っている下士官は落ちたりした。

すると一人の下士官が怒鳴った。

「何をしている突撃だレコンキスタの意地を見せろ!!」

士官の命令で動くレコンキスタ兵士しかしこの攻撃は鉄の玉を打ち出す大砲くらいしか知らない彼らにとってこの攻撃により半分は混乱していた。

しかし彼らも士官の命令で気を保ちすぐに敵の陣地を目指して突進してきた。

しかしイルマやアルビオンも陣地の接近を許ささない。

M2重機関銃の有効射程に入って打った。

「敵を陣地に近づけるな!!」

「了解!」

アルビオンイルマ連合は陣地にセットしたM2重機関銃を発射した。M2は元々は対人兵器ではない装甲車やジープなどに攻撃する為に

作られた重機関銃、人を相手に使えばどんな甲冑や楯をしても紙同然である。

M2の攻撃によりレコンキスタ兵士は次々と倒れていく突撃をやめようとしなかった。

イルマもM2だけでなくトプソンM1やブローニング等を使い敵の進撃を止めていた。

あまりの銃弾の雨にさらされて次々とレコンキスタ兵士は命を落としていった。

「司令官、敵の攻撃が止みません彼らの連発式の銃で我々の兵士は次々とやられています!!」

「えーい何をしているか!! 平民の兵器にやられて恥ずかしいと思わないのか早く敵を倒せ!!」

レコンキスタ陸上部隊の司令官が怒鳴るが攻撃の手は止まらない一部のメイジが火系統の魔法で地面を燃やして煙幕がわりにして攪乱したが結局は一部しか隠れておらず全体を隠すまでに至らなかったそして結局はM1ライフルのアウトレンジの攻撃により殺られてしまったM2の銃弾にこっぴど微塵にされてしまった。

そしてイルマの戦車チヌが歩兵と連携を組みレコンキスタ陸上部隊に向かった。

敵は戦車を見て驚いていた。

「何だ、鉄の箱か？」

「でも、動いてるぞ！」

レコンキスタ兵士がそんな事を言ってる矢先にチヌの75mm砲がレコンキスタ兵士に向けて火を吹いた。

レコンキスタ兵士はチヌの砲で吹き飛ばされてた戦車の援護を受けてアルビオンイルマの歩兵がレコンキスタ陸上部隊に攻める。

相手が攻めるのを見て突撃を仕掛けるが相手の方が射程が長いせいでレコンキスタの魔法による攻撃も弓も当たらない。

逆に殺られてしまい退却するレコンキスタ兵士その光景にレコンキスタの司令官が怒鳴る。

「誰が逃げると言った！レコンキスタに忠実を誓うなら逃げず……」

銃弾がレコンキスタの司令官の心臓に命中したその司令官が命中した部分から血が流れそして馬から落ちてしまった。

最高司令官がいなくなり更に混乱になったレコンキスタそれを見守っていた一人の司令官ダーナである。

「陸上部隊の司令官が戦死したこの戦い我々の負けだ……降伏しよう」

「しかし、ダーナ殿まだ我々は……」

「陸上部隊の司令官が戦死してそして敵の武器に次々と我が兵は殺

られているそれにこの部隊はまだ敵の一部だ現在の我々には勝ち目はない」

ダーナは陸上部隊の司令官の次に位が高い司令官である陸上部隊の司令官が戦死した事により現在のレコンキスタ陸上部隊の指示が任せられる。

ダーナは巡洋艦の艦長であるが巡洋艦を失ってから陸上部隊の副司令をやっていた。

ダーナの命令で降伏を言うように指示が出た
レコンキスタ陸上部隊を撤退させた。

一部の兵士とダーナが出て来て白旗を持ちながら歩いた。

「真田大佐、敵は降伏するようですいかがなさいますか？」

「わかった投降するなら出迎えようしかし降伏するといっても油断しないようにそして敵に乱暴はしないとアルビオンの司令官に伝えてくれ」

「了解しました」

こうして降伏を受け入れた真田、アルビオンの司令官は澁々と受け入れたこの戦いでレコンキスタ陸上部隊は八千もいた兵士が千五百までに減っていた。

敵の兵士は何の抵抗もなく投降してくれた、そしてアルビオンイルマ連合はニューカッスル城の防衛に成功した。

この勝利にアルビオンはヴェールズも含めアルビオン兵士が皆喜び

宴会状態で喜んだという。

第十五話 トリステインからの客1

ニューカッスル城の防衛に成功した。

アルビオンイルマ連合は現在、イルマから送られた武器で簡単な扱いを受けていた。

重機関銃や無反動砲や迫撃砲は支給されてないがイルマ軍隊の主流の銃であるM1ライフルだけでも扱いや整備を教えていた。

しかしこれは平民兵士ならすぐにこの銃の扱いに慣れよと必死だったがアルビオンの一部のメイジはこの申し出に拒否をした。

しかしそのメイジも一部だけであり特に若いメイジは新型の銃に興味があるようで何より数で上回るレコンキスタ陸上部隊を蹴散らした武器に興味があった、この武器の実用性は直ぐに急いで使えるようにヴェールズから言われていた。

若いメイジや平民兵士は直ぐに準備に取りかかりイルマの兵士達からこの武器の扱いを勉強したがアルビオン王家に長く使えている老人メイジや中年メイジはなかなかこの申し出に受けようとしなかった。

彼らは「平民の武器に頼るなどアルビオン軍の恥だ!」と言ってるのである。

しかしそんなメイジでもニューカッスル城防衛の時に一緒に戦った兵士や司令官はイルマの武器の威力に感動してヴェールズが言う前に直ぐにこの扱いの申し出に出たのである。

こうしてニューカッスル城攻防戦から二週間が過ぎた。

レコンキスタとの戦線を少し伸ばす事に成功したアルビオンイルマ連合は戦線を四割伸ばす事に成功した。

この活躍もイルマの武器による活躍が大きく新たな戦いの戦術も大きくあった。

現在レコンキスタが六割アルビオンイルマ連合が四割といった感じ

であるがアルビオンイルマ連合が戦線を押して形成が逆転する勢いがあった。

そしてそんなニューカッスル城にある連絡があった。

偵察に出ていたイルマの竜騎士からである。

『ニューカッスル城からイルマ竜騎士から現在レコンキスタが民間の飛行船を襲っています敵の数は竜騎士が10騎であるため我々だけでは戦えません至急、航空隊の要求します！』

「わかった、直ぐに航空隊を送る場所を説明しろ」

レコンキスタの竜騎士に民間の飛行船が襲われるとはレコンキスタも余裕がなくなって来ている状態であった。

そして空母・・・

「くそ、この前も俺達の小隊が出撃したのにまたか！」

ご存知のとうりこの小説の主人公の大和 洋介である。

洋介は愚痴をこぼして直ぐによいされてる自分の愛機にのった。

「隊長、愚痴をこぼすなら上に言ってくださいどうぞ」

パリが無線でそんな事を洋介に言う。

それに便乗してナイも・・・

「隊長、部下に当たるのは上官として恥ずかしくないのでは・・・」

ナイも洋介にたいしてそんな事を言った。

洋介はそんなこんなで少しキレ気味で・・・

「やかましい、とにかく行くぞ!!」

「了解!!」

・
こうして洋介達の小隊の零戦が空に飛ぶ敵の竜騎士を倒す為に・・・

第十六話 トリステインからの客2

洋介が空母から発進して直ぐに目標についた無線の情報によると・ロシユールから出発した船がこのアルビオンを目指している途中でレコンキスタの竜騎士にその船が襲われている今は船に乗っていた風竜を使い魔にしているメイジと協力して何とか守っている状況であるらしい。

そしてその船が見えた船の当たりでイルマの竜騎士二匹と風竜に乗っている少女が戦っていたがやはり敵の数が多いそいで押されている。

「全く、民間の船を襲うなんてレコンキスタも余裕がなくなって来ているな」

「みたいですね隊長」

ナイとそんな事を言ったそしてようやく目的の場所について戦闘準備に入った。

「敵は竜が十匹だけだ船に被弾させないように攻撃しろいな！」

「了解!!」

洋介達の小隊はレコンキスタの竜騎士に向かった。

洋介は直ぐに20mm機銃で竜騎士の二匹を撃退したレコンキスタ

の竜騎士はいきなり敵が現れた事に驚いたが船を標的にするのをやめて零戦に向かった。

しかし零戦と火竜では速度の差が激しいため火竜のブレスが当たらないしかも射程も短いため零戦の20mm機銃や12.7mm機銃の攻撃に次々と遣られていく。

洋介が二匹をやりおえて直ぐに他の竜騎士の後ろを取った。

「もらった！」

12.7mm機銃で、竜騎士をさらに二匹を落としたほかにもナイヤパリも連携して敵の竜騎士を攪乱してそこで固まった竜騎士を20mm機銃で撃破していった。

こうしてレコンキスタの竜騎士を撃破に成功した洋介達であった。零戦の光景に船の乗員は驚いた。

「何だ、あの竜！」

「風竜より早くなかったか！」

船の船員は零戦の速度や攻撃に驚いていた。しかし一人の少年は別の事に驚いていた。

「な、何であれがこの世界に・・・」

一人の黒髪の少年が呟いたその少年は他の乗員とは別の表情をしていた。

こうしてレコンキスタの竜騎士を撃退することに成功した洋介は船を護衛をしながらニューカッスル城へ戻った船もニューカッスル城で降りて洋介も空母に着陸した。

そして直ぐに洋介達小隊はさっきの飛行船の所に向かった。すると一人の少年が洋介の所にきたのである。

「もしかして、貴方はさっきの零戦を操縦していた人ですか！」

その少年はパーカー姿でそして黒髪の少年であった。
そうその少年は日本人であった。

第十七話 トリステインからの客3 (前書き)

ついにルイズと才人が登場します。

第十七話 トリステインからの客3

洋介に話しを掛けてきたのはパーカー姿で黒髪の少年であった。

「すみません、あれは零戦ですよね？」

「君は零戦を知っているのかすると・・・君は地球からきたのか？」

洋介は言った零戦を知っているのはイルマの人間くらいしか知らないそれを知っているとどう見ても彼は地球からきた人間である。

「はい俺は平賀 才人です」

彼はどうやらこの世界に来てしまった日本人であった風間社長からこの少年を地球に送ったとは洋介は思わなかった。

どう見ても一般人の少年であるからだ。

そこで洋介はある事を才人に聞いた。

「平賀 才人君だっけ君はどうやってこのハルケギニアに来たんだ？」

「はい、実は俺は・・・」

洋介は聞いた何でも彼はパソコンの修理をするために秋葉原に行っていたらしくそこで偶然にトリスティン魔法学院で行われた使い魔儀式の召喚の時に地球からこのハルケギニアに呼び出されてしまったそしてその貴族に使い魔にされてしまい今でも使い魔をやっているらしく大体の事を洋介に聞いた。

「それは災難だな」

「全くですよ、俺のご主人は使い魔の扱いは酷いんですよ洗濯は無理やりやらせるし、遅く起きたら飯は抜きになるしまったもんじやないですよ!」

どうやら彼のご主人様は才人君の扱いがかなり酷い事を聞いたまあイルマならともかくトリスティンの平民の扱いなどハルケギニアでは一位か二位を競うくらい平民の扱いが酷いのだから彼は地球の間ではあるがこの世界では彼は平民として認識されるのだから彼には同情する。

まあ平和な日本の生まれの彼にはこのハルケギニアでの生活はかなりキツイだろ。

「それにしても洋介さんはどうしてこの世界にいるんですかもしかして俺と同じように・・・」

「いや、俺はこの世界に軍人としてスカウトされたから君のように

召喚された訳ではない」

洋介はそう言ったすると才人は洋介にあることを聞こうとした時であつた。

「このバカ犬！あんたなにご主人様をほったらかしてるのよ！！」

「げ、ルイズ！」

洋介と才人の目の前にいきなりピンク色の髪をした少女が現れたマントをしている所を見ると貴族である事が洋介はわかった。

「才人君・・・彼女は？」

「あ、こいつは俺のご主人様のルイズです」

どうやら才人をこの世界に召喚した張本人らしい洋介がそんな事を考えているとルイズという少女が洋介に所にきた・・・

「あんた誰なの名を名乗りなさい！」

「俺はイルマ軍人の大和 洋介だが何か？」

イルマの軍人と聞いてルイズという少女が才人にいきなり・・・

「このバカ犬！イルマの人間に何を話かけてるのよ！！」

「や、やめろルイズ！！」

ルイズはいきなり鞭を出して才人の事を叩いた何故、鞭を持っていたかは気になるが才人はルイズに鞭で叩かれて続けた。あまりにの行動に洋介は呆気にとられた洋介はあまりにもやりすぎと思ったがルイズの事を止めた。

「お、おいお嬢さんそれくらいにしとけよ」

洋介はルイズの事を止めた。
するとルイズは怒鳴った。

「離しなさいよ！イルマの人間の癖に調子に乗るんじゃないわよ！！」

何やらルイズは凄く不機嫌であった。

どうやら少女はトリスティン貴族だからイルマの事を毛嫌いしている事はわかるが彼女の場合は凄く嫌っているらしい洋介もこんな気の強い少女は地球でもあった記憶がない洋介はこんな気の強い少女の使い魔になった才人をホントに可哀想と思った。

「ルイズ、いくら何でも失礼だろ！！」

「うるさい、うるさい！！私はイルマの事をゲルマニア以上に嫌いなよ！！」

大体ここまで感情を出して毛嫌いしているやつも珍しいなと洋介は思う才人はそんなルイズの態度に怒ったいくら何でも初対面の人間にたいしてあの態度はないと思ったのだろう。

「洋介さんすいませんルイズが・・・」

「いや、別に俺は構わないが」

全くこんなご主人様と付き合う才人の事を尊敬したくなる洋介であった洋介なら絶対にあんなやつを使い魔にはなりたくないと思ったもとより使い魔になる気はない。

「何してるの才人、ヴェールズ様の所に行くわよ！！」

「わ、わかったよ・・・洋介さんまた後で話を」

「ああ、またな」

不機嫌なルイズに才人は着いていった。
そんな光景に洋介はこう思ったあの少年は絶対に苦勞人だと。

第十八話 トリステインからの客4

才人と別れた洋介はとりあえず空母に戻る事にした。
そんな洋介であつたが一人の兵士が洋介の所に来た。

「大和少尉、すいませんヴェールズ王子が何でもトリステイン大使と話があるようなので大和少尉にも同席してほしいとの事です。」

「王子が・・・わかった戻れ」

洋介が兵士にそう言つて兵士は洋介に敬礼してその場を去つた。

「やれやれ、ヴェールズも人の扱いが酷いぜ」

洋介がそんな事を呟いたしかし何故、洋介がヴェールズの事を呼び捨てにしているのかこんな所をアルビオンの将校に聞かれ普通に怒鳴られる所だが洋介は前のニューカッスル城の防衛戦の勝利の時に宴会に近い騒ぎの時にヴェールズと会つていてそこでヴェールズと話合つていてヴェールズが自分の事を呼び捨てにしてくれと言つたのである。

そんな王子の行動に少し面を食らつた洋介であつたが直ぐにそれを受け入れた無論そんなことはいけませんが将校達がない時にヴェールズの事を呼び捨てにする事にしたのである、そして洋介はヴェールズの所に向かった。ヴェールズの部屋に入ろうとして衛兵に止められたが直ぐに呼ばれた事を言つて洋介はどうしてもらつた。

「イルマ軍、空軍所属大和 洋介入ります」

無論洋介はドアをノックして入った。

するとそこにはヴェールズもいたがそこには何とルイズと才人もいた。

ルイズは洋介が来た事に・・・

「何で、イルマのあんたがここにいるのよ!」

「いや、ミス・ヴァリエール僕が彼を呼んだんだ何か不満かな?」

「い、いえありません」

さすがのルイズもヴェールズがいる前ではおとなしいようだそれを見て才人はホッとしていたどうやらルイズの強気的態度に彼は毎日苦勞していると洋介は思った。

「それでミス・ヴァリエール君が僕に話しとは?」

「は、はいこの手紙をお渡しするために・・・」

ヴェールズはルイズからの手紙を受け取ったそして読んでいくうちに呟いた。

「そうかトリステインはゲルマニアとの同盟を結ぼうとしたが失敗したか・・・」

その言葉は残念そうに聞こえず何やら少し嬉しそうに聞こえた。

洋介はヴェールズに聞いた事があった。

ヴェールズはトリステイン姫アンリエッタとは昔、恋の近いをしたなかと聞いた多分その事があるためゲルマニアの同盟失敗にヴェールズは喜んだであろう。

「しかし、そうなるとトリステインは大変になりますよ王子」

「確かに・・・それに洋介君・ここにはうるさい重臣がないから僕の事を呼び捨てで良いよ」

「そうか・・・ならヴェールズこれでいいか？」

洋介がそう言った時にルイズは信じられない顔であった。

普通、王族にたいしてこんな軽いやり取りは普通ではない貴族のルイズからして見れば信じられない光景であろう、そんな会話を目にしてルイズは洋介にたいして怒った。

「あんた平民の癖に何よその態度！それにトリステインが大変でどうゆう事よ！！」

洋介はルイズは世間を知らな過ぎると思ったトリステインはハルケギニアから見れば小国である。

そんなトリステインがゲルマニアの同盟に失敗に終われば結構苦しくなる何故なら現在はアルビオンとイルマとの二国を相手にしているレコンキスタしかしそのレコンキスタも現在はアルビオンとイルマに逆転されそうになっている。

そんな中でトリステインみたいな小国が同盟を結ばなければレコンキスタは一旦トリステインを占領して戦力の状況を計ろうとする事もある。

「少しは・・・世の中を見たらどうなんだトリステインのお嬢さん」

「な、なんですって!!」

洋介の態度が気に入らないのかルイズは杖を洋介に向けたそんな洋介もとっさの判断で携帯していた拳銃を構えた。
そんな所に才人がルイズを宥める。

「ル、ルイズ落ち着けよ!」

「離しなさいよ!!」

ルイズを止める才人であるがそんな才人を気に求めずルイズは暴れる。

それからしばらくしてルイズは落ち着いてそれから話し合いが続く
そこで終わった。

ルイズは最後に部屋を出る時に「トリステインを侮辱した事を覚えておきなさい!」とルイズは洋介に言って出ていった。

そこでやっと落ち着く事が出来た洋介はヴェールズと笑った。

「やれやれ、あんな気の強い嬢ちゃんは23年生きて初めてあったぜ」

「ははは、僕もミス・ヴァリエールの強気の状態には少し驚いたよ」
洋介とヴェールズは笑いながら喋ったすると洋介がある事を話した。

「しかし・・・トリステインがゲルマニアとの同盟が失敗となると、トリステインはレコンキスタの侵攻を受けやすくなったな」

「そうだね僕の国の貴族が反乱を起こした事には変わらない他の国の迷惑ならないうちに早くレコンキスタを倒さなくては」

ヴェールズが固い決意をした。
すると洋介がある事を言った。

「それより俺は今日は出撃した挙げ句、休ませず呼び出したんだ、それなりの用意はしてくれよヴェールズ」

「はは、分かってるよアルビオンの最高のワインだよこれで良いかな？」

「おお、悪くないな」

洋介はヴェールズとワインを何杯か飲みながら話していた。
その光景は王族と平民の関係ではなくまるで友達のような関係に見えた。

第十九話 トリステインからの客5

ウェールズとの酒の席を後にした洋介は今日は竜騎士との戦闘もあったしかし洋介にとっては竜騎士の戦闘は自衛隊時代のジェット機の訓練よりは楽な方であった。

無論、実戦と演習とではかなり大きく差はあるが洋介がジェット機の訓練の時はレシプロ機のGはジェット機と比べれば軽い方であった。

しかし洋介は酒を飲んでる時は忘れたが洋介の小隊は何故か非常事態の時の出撃は毎日のようにあったその理由は上官に聞いたが教えてはくれなかった。

とにかく洋介は酒を飲んで少し気分が良くなったのか空母に戻って寝ようと思った時である洋介は一人の少年にあったその少年は・・・

「あ、大和さん」

「才人君かここにいたのか？」

洋介があっただのは自分とは全く違う形で地球からハルケギニアにきた少年、平賀 才人であった。

「あの今日はルイズが本当にすいませんでした」

「別に俺は良いよしかし君もあんな強気な少女の使い魔になって大

変なんじゃないか？」

才人は洋介の言葉に苦笑いした洋介はトリステインの貴族に会うのは初めてであった。

トリステインの貴族がイルマを嫌っている事は聞いていたがそこまで感情をむき出しにして感情を表に出すとは洋介は思わなかった無論、ルイズの貴族としてのプライドが高いだけなのだがそれでもあの席の中で感情をむき出しになって暴言を吐いたら国際問題になる可能性があった。

何しろ皇太子がいる席であんな事をルイズは言ったのだから。

「ルイズのあれにはもう慣れましたよ、まあ受けたくはないですけど」

才人は苦笑いしながら洋介と話した。

確かにあんな少女と一緒にいる時間が長くその扱いに慣れたとはいえず才人の人の良さも逆に仇になってるきもした洋介であった。

洋介と才人が話している二人の女性と一人の男性にあった。

「あら、ダーリンこんな所にいたの！」

「やあ、才人またルイズが何かやらしたのかね」

「・・・」

そこには赤髪で女性にしては長身の女性と青髪少女でルイズより小柄な無口な少女と金髪で何やらキザったらしい少年が才人の所にきた。

「キュルケ、タバサ、ギーシュ、どうしてここに？」

「ダーリン、それより私とアルビオンの最高のワインを飲んで一夜を楽しみましょう！」

キュルケの大胆なアプローチに才人は困っていたが逆に喜んでいるようにも見えたまあキュルケという女性はスタイルも良く胸もあるルイズとよりは天と地の差があるくらい違うのだからルイズも可愛いがキュルケはまた違った魅力のある女性でもあった。

洋介はそんな三人を見てある事を聞いた。

「少しいいか君達はその服装を見る限りはトリステイン魔法学院の生徒だが何故、学生がこのアルビオンに来ている？」

その言葉にキュルケやタバサはこう言った。

「それは・・・言えないわね」

「・・・右に同じ」

キュルケとタバサは洋介には教えてはくれなかった洋介は脅してや

ればいいが彼女達がスパイの容疑もなくそうする事はできない。
するとギーシュが・・・

「ふ、僕たちはトリステインの姫、アンリエッタ様からの任務を任せられたのさ」

ギーシュがキザったらしく決めると才人、キュルケ、タバサの三人がギーシュを睨んだ。

「ギーシュ!!」

二人はギーシュに怒鳴ったそれはいきなり他国の人間にいきなり国の代表ともいうべき人物から任務を任せられてると言えば誰でも疑うだろう。

二人はギーシュの口の軽さに呆れて怒った。残りの一人のタバサは睨んでるだけで二人のようにには怒鳴らなかった。

それからしばらくしてギーシュは反省しといた（正座をされている）それから才人は洋介に・・・

「あの、大和さんこのバカ（ギーシュ）の話は・・・」

「俺は何も聞いてない酔ってるから」

何やら嘘っぽいセリフで言う洋介であるが普通なら軍人なら洋介見

たいな行為は取らないだろうが洋介も才人の人柄を見て信用が出来るためこのような事を言ったのだろう。

「大和さん・・・ありがとうございました」

才人はお礼を言ったそれから才人達は洋介と別れた、それから洋介も空母に戻ろうとしていた・・・

「待ってくれ才人、僕はいつまで正座をしていればいいんだい!!」

何やら聞こえた気がしたが洋介、才人、キュルケ、タバサは無視した。

それから後日、ルイズと才人のキュルケ、タバサ、ギーシュは飛行船に乗りトリステインに帰ったという。

ロサイス軍港強襲1

イルマがレコンキスタとの開戦に介入して1ヶ月かたっていた。

これまでアルビオン王家が不利な戦局にたたされていたがイルマがアルビオン王家と同盟を結びその戦局は一気に打破した。

イルマの最新型の銃を初めとするこれまでハルケギニアに存在しなかった兵器を数々と排出して戦いレコンキスタとの戦局を押し返している状況であった。

そして現在イルマとアルビオン王家はある作戦を建てていた。

それはロサイスの強襲である。

現在レコンキスタに不満がある若いメイジの兵士や元々王家に使っていた軍人がレコンキスタを抜けてアルビオン王家に着いているのだ彼らは自分たちの上司がレコンキスタに着いた為に嫌々レコンキスタに参加していた。

レコンキスタの力が弱まりそしてこれ以上レコンキスタに付き合っでは自分の身が持たないとわかってる為に彼らは抜け出したしかしこの問題はレコンキスタにとって頭痛の種であったそれが原因でレコンキスタはイルマと王家戦う以前の問題に悩まされていた。

この状況を打破する為にニューカッスル城を落とそうとしたが結局何回きてもイルマの新型戦艦、銃や戦車、航空機により撃退されて

しまい。

レコンキスタの士気はかなり低下している。

王家は現在のレコンキスタの状況を思い一氣に現在レコンキスタの本拠地である。

ロサイス軍港を強襲してアルビオンの内乱を終わりにしようとした王家も出来れば早くこの内乱を終わりにしたかった。

いつまでも内乱を長引いては国力が低下してしまうからだ。

今でも十分低下しているがアルビオン王家としてはこれ以上の国力低下を避ける為にロサイス軍港の強襲を提案してレコンキスタとの戦いに終止符を打とうとしたがこの作戦はリスクが高かった。

ロサイス軍港は言うなればレコンキスタの本拠地であり軍艦や竜騎士がかなりの数が配備されているそんな中に強襲するのはかなりのリスクがいるがこの作戦に空軍にイルマの航空機隊が援護することになっていたまずはイルマの航空機でできる限りの地上戦力を減らす事になっている。

こうしてレコンキスタから脱退した。

兵士の助言と共にイルマ、アルビオン王家のこの戦争の終止符を打つためのロサイス軍港強襲の作戦が始まろうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1718j/>

ハルケギニア革命～レコンキスタ編

2010年10月10日01時21分発行